動的視点から見た日本人の形成（試論）　H31.4　NM

（第 2 回改訂/追加）

日本人は何処から来た？という議論もあるが、**日本人はどう形成されどう列島に拡がっていったか？**というもっとダイナミカルな議論の方が重要ではないかと思う。以下、全くの試論として…
（かなり怪しげな記憶で書いています。偏見と記憶違いにご容赦を！）

日本人は日本語を話し、ある種の文化的アイデンティティを共有する集団であるが、決して単一の血統にぶらさがった集団ではない。確かに多くの社では天照や大国主が祀られているが、多分それは長い時の流れの中で人為的に淘汰･集約されたものではないか？　消された神々の影

単一純粋な日本人は存在せず大和朝廷のもとで種族が寄り合い、少なくとも 11 世紀までに日本語を話し文化を共有する集団になったと考えられる。その集団構成は、

倭人系 50%＋帰化系 35%＋縄文系 15%

ではないかと思う。細かくいえば、

倭人系➞呉系, 越系, 西南夷系,海人系/　帰化系➞韓系, 華系/　縄文系➞土ぐも系, 東夷系, アイヌ系

紀元前、縄文海進期の日本にいたのは少数の縄文系であって、そのあと倭人系が渡来して増殖し、さらに帰化系が渡来し増殖した。注意すべきは**倭人系も帰化系も渡来してきたこと**である。そしていずれもが東アジアに根付いた**新モンゴロイド**であることである。

Phase１）縄文海進期　竪穴住居、食縄文期　擦文文化、オホーツク文化

・個人的には BC4C までは渡来民の影はなく縄文人が跳梁する世界であったと思う。狐･狸･猿･鹿･羚羊･熊･狼に混じって人間がいたという状態だろうか？もちろん魏志倭人伝のような記録もなく遺跡や遺物から憶測するほかないが長期的に眺めて思いのほか大きく動いていた時代ではないか？

・縄文中期頃まで新石器以降の原日本人の上にアイヌ系がかぶさって土クモや東夷が派生したのではないか？　西日本では土ぐも系、東日本では東夷系と云うが実際は同系と思う。人種的には新モンゴロイド傾向がまさっていて、**古モンゴロイド**のアイヌ系(長頭,奥目,多毛,湿耳)とは違っていたと思う。(土クモという呼称は九州由来で、地域によって佐伯とも国栖とも八束脛とも)

・採取・狩猟・漁労生活であり土地への縛りがなくかなり交易範囲が広い例えば青森**亀ヶ岡土器**は奈良橿原でも出土しているし熊本の遺跡からはソウル周辺のものがでている。海を渡っていたのだろう。
黒曜石/ヒスイ/小笠原

・東夷系縄文人について大和朝廷の文書では、長幼の序がなく獣肉を喰らい樹木/物陰に棲み…と**自然人**として描写されているが、狩猟/漁労/血縁の利便から群れ(集落)を為していたとみるのが妥当と思う。政治的な結束があったか…　集団同志の首狩り的な衝突は十分考えられる。**台湾霧社諸族の例**

・**生贄・人身御供**の風習があったと思われる。例えば諏訪神社の例(一年神主)や曽爾高原門僕神社の頭甲など、アステカ・マヤ・インカに通じる旧世界共通の現象。　嵯峨天皇の夢

・アイヌは基本的に狩猟・漁労民族、アイヌの風習や言葉は倭人の民俗に強い影を残している。
古い地名にはアイヌ語起源が多いと云われる。セブリ、ウタリ、ベツ、ナイ、グリ、ツミ、キリウシ、カイなどなど、生駒(ユックオマー)、富雄(ツミ)、平群(グリ)、石切(イウスキリ)、牛深、甲斐

Phase 2） 倭人の到来と拡散

・一般には弥生人というが、**倭人(和人)**と云う方が適切だと思う。倭人は長江流域に広がっていた稲作農耕民で百越(呉越含む)系の種族とされる。春秋戦国時代 BC４C ぐらいに日本への移動が始まったと思われる。呉の倭人は直接博多湾周辺、越の倭人は朝鮮経由で日本海側、西南夷の倭人は中･南九州に向かって線的に展開し、海人系の倭人は黄海-韓半島-対馬壹岐-日本海に面的に展開したと思われる。

素戔嗚(出雲)は天照(筑紫)の弟である事実　　安曇の移動

・倭人の言語が何だったかについては諸説がある。ウラル・アルタイ語系、アルタイ語系、オーストロネシア語系、アルタイ・オーストロネシア語系、中国語系などなど。倭人の出自が百越辺りであったとすればアルタイ・オーストロネシア語系が妥当ではないかと思う。朝鮮語にも南島語にも近い。

・倭人の生業は、長江以来の稲作、漁労および交易。交易については **”南北に市糴し交易を生業とした”** という魏志倭人伝の記述がある。恐らく安曇辺りを云っているのだろう。

・列島に住み着くまで倭人はボートピープルだったという説もある。やがて博多湾に入り板付辺りに**環濠集落**を作った(BC4C)。相前後して松浦-唐津-博多-洞海湾-下関にも到来した。土井が浜遺跡の骨はみな長江の方向へ向いていたらしい。倭人到来の波はかなり長く続いたと思う。かれらは海岸を伝って水路伝って移動している。青森の田舎館-垂柳遺跡あるいは静岡の登呂遺跡も然り。遺跡→倭人コロニー

・博多周辺からスタートした弥生集落はやがて 200 年かけて西日本の各地の平野部に拡がり、それから東日本の方にスポット的に集落ができていった。東日本は東夷の蟠踞する地域で拡散のスピードはは鈍い。一部で**縄文人の弥生化**が起きている。　　相模の例

・稲作は富の蓄積をもたらす。例えば博多周辺の吉武高木遺跡/早良遺跡では BC2C 頃から**王権の成立**が見られるという。4 世代ほどで富裕層と貧困層に別れ 4 世代ほどで富裕層から卓越層がでて、次第に首長支配の集落結合体としての**クニ**が形作られていった。

・稲作に水争いはつきもので、もともと集落同士は激しく争い、王権の伸長とともにクニ単位の争いになる。おそらく博多周辺から拡がった弥生の波は遠賀川を南下する波と重なりながらやがて豊前平野、有明海周縁あるいは築後平野辺りに達し、**クニ同士の争い**が激化していったと思われる。この争いは周辺の西南夷系倭人との相克を含んでいる。

また九州の倭人集落は縄文人の襲撃に曝されていた。**農耕民と狩猟採集民の相克**である。豊前風土記逸文だったか、海石榴市で撲殺される土グモの話がでてくる。倭人は土グモやサエキを**だまし討ち**にして排除していった。この記憶は各地の伝承に残っている。

海石榴市➡霧島山麓のカス壁教➡迫害の記憶、五瀬命の乱暴

また弥生中後期は富の格差によって階層化し富と権利をめぐって**部落国家単位の倭人同士の争乱**も頻発していたと思われる(吉野ヶ里/など環濠集落)。

・中国文献の倭国関連記事によれば
漢倭奴国王入貢(57 年)→倭国王師升入貢(107 年) →倭国大乱(70～80 年間) →女王卑弥呼入貢(239 年)
奴国(村落国家⁇)は博多湾周辺にあったと思われ倭国連合の構成部落国家のひとつと考えられる。

倭国王の実体については、弥生文化圏全体と特定地域連合体という２つの議論がある。たぶん後者の地域連合ではないか？例えば北九州(高天原系？)あるいは出雲(大国主命系？)が考えられる。この連合体は**師升**の後で乱れ、隣接地域も巻き込み更に**飢饉の影響**が加わり大規模戦な戦乱が起きたと思われる。戦死を思わせる人骨が福岡、山口、島根などから出土している。あるいは瀬戸内海沿いに**高地集落**の跡が分布している。魏志倭人伝によれば卑弥呼の登場でこの争乱が一応収束したようだがおそらく１時的なものと思う。この戦乱は後漢の**霊帝の代(160 年頃)**から 70～80 年続いたと思われるから **160＋70(80)＝230(240)年になり卑弥呼入貢 239 年にマッチ**する。

注目すべきはこの戦乱が北九州から島根(兵庫)に及んで多分**呉系倭人と越系倭人の人類学的/民俗学的なミキシング**がかなり進んだことである。

・さて３C 半ばいよいよ卑弥呼の登場になる。邪馬台国についてはあまりに議論が多くてここでは割愛する。ただ個人的に云えば、九州説が妥当ではないかと思う。

① 弥生化密度から云えば俄然,北九州は濃い。大和は縁で、その東は東夷(蝦夷)の跋扈する世界である。確かに唐古・鍵の大きな遺跡はあるが繁栄したコロニーのひとつにすぎないと思う。
② 大和説では地理的記述が合わない、大山(富士山)まで陸続きで大和にヤマトは見当たらない。
③ 卑弥呼と争った狗奴国はどこか？**クコチ彦は菊池彦だと思う**が…(菊池は築後平野に隣接)。
④ 桜井市の纏向遺跡があたかも邪馬台国のように云っているが、遺跡は崇神紀の宮跡ではないか？全体に時代がずれている印象がある。箸墓の形状サイズは記述にマッチしないと思う。

ヤマ**ト→**倭語では山の**入口→**奈良では山**口**という。奈良にヤマトはない

多分卑弥呼-と養女トヨの後、邪馬台国の覇権は失われ、北九州の連合王国は解体したと思われる。

Phase 3) 倭王権の移動

・筆者は右翼でない。人類学/民俗学/考古学/文献学の成果を取り込みユーラシア大陸東辺に分布する東アジア人としての日本人とその実体を理解することはリベラリストの欠かせない要件だと思う。

・九州王朝説と云うのがある。決してこの説に組みしている訳ではないが、築後平野の奥の朝倉を中心にして遠賀川南下勢力と組する形で連合王国ができたのではないか？朝倉に甘木という地名があるがもしアマキが古来からの地名であるなら、アメ氏が渡来したところということになり、アメ氏即ち大君(天皇)の祖の到来地に比定できる。アメ氏は対馬壹岐辺りにいた海人の族長筋ではなかったか？多分筑後川を遡ってアマキに渡来して巫術占いの功をもって朝倉国の王になったように思う。
(朝倉は斉明天皇の朝倉宮のあったところ、斉明は意識的に先祖の地に仮の御所をおいたのでは？)

・倭人連合王国の首都は決して安全の地ではなかった。**雨柱が連続して襲いかかり**/あるいは西南夷系や縄文系に襲撃され/あるいは博多周辺の倭人連合に敗れ/あるいは越系倭人の攻撃をうけて滅亡し(縮退し)、その生き残りは南九州に逃れた (これが瓊瓊杵の**天孫降臨の実態**ではないかと思う)。

邇邇芸命→彦火火出見命→鵜萱葺きあえず命→五瀬命･磐余彦　(せいぜい 40 年間？)

日向三代を経てアメ氏は、分家の**饒速日(物部氏の始祖)**の後を追うように葦原の中つ国に発進した。所謂、**神武東征**である。

噴火/台風/洪水/深層崩壊

・神武東征の背景は何だったのか？単純には**そじしのむなし国**に行き詰まり、同族**物部氏の東遷**の跡を追ったのだろう(物部はアメ氏の分家とみていい)。東遷の経緯は

日向➡宇佐➡周防➡安岐・多邪理➡吉備・高島➡浪速**白肩津**➡(長脛彦迎撃) ➡紀国男之水門➡熊野(高倉下➡八咫烏) ➡大和宇陀(エウカシ) ➡忍坂(土ぐも八十建) ➡磐余(兄師木) ➡(登美の長脛彦との決戦) ➡物部氏帰属➡畝傍白樫宮で即位➡大物主娘の娘との結婚

・**神武東征の説話は明治以降終戦に至るまで利用され尽くされ、その反動から否定説が強い。**しかし個人的には、次の理由から**神武東征が 3C 末-4C 初めの出来事としてあり得る話**ではないかと思う。

① 神武東征説話は高句麗の建国説話に類似すると云われ確かに類似点もあるが、説話としては独自の一貫性があってそれなりにリアリティがある。決してパクったものではないだろう。

② 3C の近畿には鉄矢じりの出土がないが、北九州には在る(戦力差がある)。　鉄剣/長弓

③ 鏡の出土は近畿でも増えているが、やはり九州は多い(文化差がある)。

④ 前方後円墳が近畿には多く九州には少ないという傾向はあるが、これは箸墓古墳以降である。

⑤ 東遷軍の主体は大久米/大伴に率いられた強力な**熊襲/佐伯の一派**でありリアリティがある。

3C 末頃に北九州で王権が成立した後、退避的に南九州に移り近畿に移動したと考えられる。安本氏の見立てを借りれば、**卑弥呼と瓊瓊杵と神武**はつながり、

239 年卑弥呼➡250 年頃とよ➡250～290 年日向 3 代➡290～310 年神武東征

・神武東征の経路に沿って一連の勢力分布ができたように思う。九州-中国の国造には神武の子孫(日子八井命、神八井耳命、神沼河耳命の系統)が多い。

Phase 4)　倭王権の膨脹

・奈良の**葛城-樫原-桜井**ラインに打立てられた王権は**欠史 10 代**を経て崇神天皇の時代になると、爆発的な膨脹を遂げる。倭王権の拡大(倭の **Conquest**) の始まりである。この時代の皇統は以下の通り。

開化➡**崇神**➡**垂仁**➡**景行**➡成務➡**(ヤマトタケル)**➡仲哀➡**(神功皇后)**➡**応神**

欠史 10 代はせいぜい 80 年と見る

・崇神天皇のとき、次の 4 人の皇族将軍が治外の辺土に派遣されている。

大彦命➡北陸、武淳**川別命**➡東海、**吉備津彦**➡西道、丹波**道主命**➡丹波道

大彦命と武淳川別命とは親子、それぞれ裏日本/表日本を進み会津で合流したとされる。四道将軍の派遣は**ヤマトトヒモモソヒメ**(箸墓古墳の被葬者)と同時代とされる(4C 末)。

その平定ルートに沿って前方後円墳が分布しているので、**四道将軍実在説**が強い。征討対象は西南夷系異族や東夷(八束脛/佐伯など)やアイヌなど。征討はかなり難渋した気配がある。熱田神宮

・日本書紀には、次のような景行天皇の九州巡行が伝えられている。

周防サバ(神磯夏姫/土ぐも鼻垂等)➡豊前長狭宮(京都郡)➡豊後イタダ(大分)(海石榴市/土ぐも誅殺)➡熊襲国高屋(西都市)(熊襲市乾鹿文誅殺、市鹿文を火国造)➡熊襲平定(日向国造) ➡熊県熊襲討伐➡肥後玉来名村の土ぐも**津頬**誅殺　　巡行伝説は倭人による九州征圧の痕跡か？

土ぐも/熊襲討伐が主になっている。古事記には九州巡行の話はでていない。内容的に逸文的な色彩

が強く、九州王朝説の論拠になっている。磐井伝説に連絡

・景行天皇の時世にはヤマトタケルによる東国征伐も進んでいる。ヤマトタケル(日本武尊)は景行天皇の第 2 子小碓皇子(大碓皇子の弟)と云われるが、非常に**説話的な側面**が強い。

西征(熊襲川上タケル誅殺) ➡ 出雲征服(出雲タケル誅殺) ➡ 東征(東夷討伐)

東征は吉備武彦を副将とし大伴連などを従えた軍事行動、その説話的な経過は次の通り。

駿河**安倍市による火攻め**➡走水での弟橘媛の入水➡霞ヶ浦での東夷戦➡八槻里での大弓戦➡東夷降伏➡甲斐火焚き伝説➡吉備武彦と科野で合流➡尾張宮津媛伝説➡伊吹山での神祟り➡**伊勢神宮への浮囚**献納➡三重能褒野での死➡**白鳥伝説**

・ヤマトタケルの子の仲哀天皇は皇后の息長たらし媛(神功皇后)とともに熊襲征伐に臨んだが戦没したため、皇后は熊襲征伐を中断して海を渡り**新羅征伐**を行い、応神天皇を出産して帰国し**押熊皇子**の抵抗を排除して**応神天皇の摂政**として 69 年政治を仕切っている。応神紀で王朝交代か？

Phase 5) 渡来の波➡帰化人の大量発生

・応神期には**縄文系排除の跡を埋めるように渡来の波が押し寄せている。縄文人＋倭人＋帰化人**による**緩やかなそしてドラスチックなミキシング**の始まりである。

・渡来人のはしりは垂仁天皇時代に逃げた妻を追ってきた**天之日矛(日槍)**とされる。その足跡は

宍粟郡➡淡路➡宇治川経由近江➡若狭➡但馬　　何故アマノなのか❓

太耳の娘麻多鳥と結婚して定着、子孫は日槍杵➡清彦➡田島守…。記紀では**天之**日矛は新羅王子、風土記では神とされる。風土記では在来の**伊和神(大国主系)**と激しく土地を争ったと伝えられる。

ミミ族は西南夷系　　ツヌガアラシト伝説

・応神天皇は神功皇后が新羅征伐の中で生まれている。新羅征伐によって南朝鮮の地はかき混ぜられその余波から朝鮮半島で政治的に行き詰まった勢力がごっそり渡来してきた。即ち

秦氏(弓月君)、　東漢氏(阿知使主)、　西漢氏(～)

応神の後も渡来の波は飛鳥時代まで続き、更に帰化人たちの国内各地への拡散が続いた。

・**秦氏**は最も強勢を誇った帰化氏族である。新選姓氏禄では応神 14 年に百済より**弓月君**が **120 県の人民**を率いて帰化したとされる。秦氏の出里については百済系と新羅系の 2 通りの説がある。当初、豊前に入りその後、大和を経て山背太秦/伏見深草/河内寝屋川/難波西成東成さらに丹波/播磨に拡がっている。本拠地は京都あるいは河内の太秦とされる。土木/治水/養蚕/機織りに優れた技術をもち、淀川水系や鴨川水系を開発している。しかし農民的側面が強いとも・・・

関連氏族➡ 秦、惟宗、東儀、小畑、三上、波多野、長曾我部…、
関連神社➡ 松尾大社、伏見稲荷社、蚕の社、大避神社(赤穂)…
著名人➡ 弓月君(応神天皇)、秦河勝(聖徳太子)、秦大津父(欣明天皇)…

・東漢氏は応神紀に来た**漢人系の阿知使主**(阿智王)が 17 県の人民を率いて帰化したと云われる。ただこの後も渡来するものが多く、秦氏なみの勢力があった。東漢氏は祖先を後漢霊帝としているが、おそらく帯方郡出自の中華系渡来人が主導する集団と思われる。大和に入って**檜前**辺りに拠点を置き

曽我氏に加担し、**東漢直駒**が崇峻天皇を暗殺したことは有名。曽我氏滅亡のときはいち早くこれを見捨てている。非常に陰謀を好み天智から警告されている。　物部とは別の**もののふ**の祖
製鉄/土木/織物技術にすぐれ東文氏は官人出仕、また**軍事力**にすぐれ警護/門衛/武器制作に従事。
関連氏族としては坂上、文、池辺、荒田井、平田、大蔵…　特に坂上氏は、平安初期に苅田麻呂や田村麻呂などの将軍を出している。

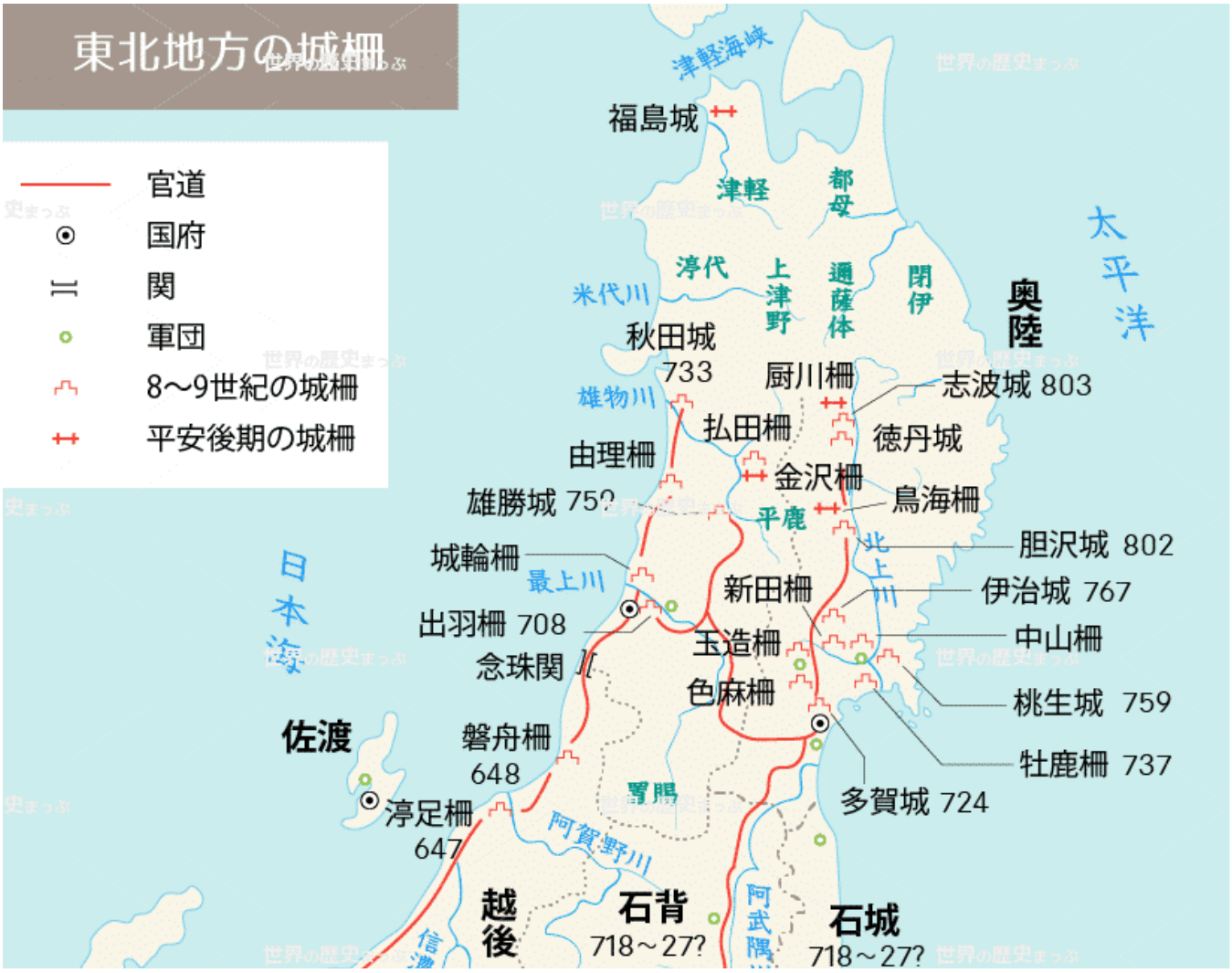
・西漢氏については東漢氏と同族とされるが詳しくはわからない。河内長野/富田林辺りを根拠にしていたようで、文氏、山背氏、錦織氏など

・韓系帰化人として百済系/新羅系のほかに**高句麗系**も多い。秦氏などよりは遅れたようで、飛鳥時代に高句麗僧が大和や島根に来ている。集団としては東日本が多く、長野/山梨/埼玉/群馬などの**開拓**に従事し、716 年**高麗(こま)郡**を建郡しており、関東一円に高句麗特有の**積石墓**を残している。
神奈川には高麗王若光の遺跡が残る。**調布市**、**狛江市**、**あきる野市**などに痕跡が多い。

・応神以降のいわゆる倭の 5 王時代に顕著な帰化系の活躍は見られない。**帰化文化の浸潤する過程**と見ていい。ただ飛鳥期に至るまで小集団の渡来の波は連綿と続いたようだ。また山陰地方にも**砂鉄精製民の渡来**の波があったとみていい。隋の使者の**裴世清**は筑前－豊前をあたかも**秦王国で華夏のようだ**と云っている。　たたら、大内/陶/武藤氏

・**帰化人は遅れてきた日本人**であり、何よりも**技術と知識**をもたらし、更に秦氏や高句麗渡来民たちは荒野を耕地に変えていった。我々の血の少なくとも **1/3** 近くは韓半島に由来する。

次頁へ



奈良時代の城柵

Phase 5）倭王権の北進－奥州経略とその反映

- 倭王権は大和朝廷(国府)として東夷を取り込み排除しながら東進して関東に至りさらに北進して奥州を征服していった。何が彼らを突き動かしたのか？　動機として**黄金採取**説も説得力があるが私はそれよりも人口膨張に由る**耕地獲得**運動を主張したい。生産性の低い段階にはおいては次男3男が食ってゆくには新しい耕地や狩場漁場が必要であった。そのため朝廷は移民策を推進した。奥州経略を論じるとき、どうしても蝦夷首魁と国府国守のアクションが注目されることになるが、

移民と移民が巻き起こす擾乱が根っこに存在することを意識しておきたい。

- 正史(記紀など)で認識されている奥州経略とこれに先行する関東経略の時歴を以下に示す。
-

崇神天皇代：　四道将軍(大彦/河別命/吉備津彦/道主命)の派遣
豊城皇子(豊城入彦)(上毛野/下毛野君の祖)の東遷
建借間命の東征　国栖を**騎馬軍**で征圧
景行天皇代：　**ヤマトタケル**の東征
502 年：　**倭王武**、中国皇帝へ上表文を提出
581 年：　蝦夷の越境と**綾糟**の服属　[敏達紀]
658～661 年：　**阿倍比羅夫**の北方経略　[斉明紀]
659 年：　遣唐使の蝦夷風俗伝奏
724 年/733 年：**多賀城/秋田城**の創建　[天平]
770 年/773 年：宇漢目らの北方逃亡と桃生城奪取(**38 年戦争の始まり**)　[宝亀]
777 年：　志波村の蝦夷蜂起と呰麻呂による鎮圧
780 年：　**伊治公呰麻呂の乱　(宝亀の乱)**
789 年：　**巣伏の戦い**(紀古佐美敗退)　[延暦 8 年]
794 年：　**坂上田村麻呂**の第 1 回蝦夷征伐
802 年：　坂上田村麻呂の第 2 回蝦夷征伐　(**阿弖流為・母礼**の降伏/処刑)　[延暦]
803 年：　坂上田村麻呂の第 3 回蝦夷征伐(→造志波城使)
811 年：　**文室綿麻呂**による蝦夷征伐
878 年：　**元慶の乱**　(北出羽の俘囚の大規模反乱)
1051 年：　**鬼切部の戦い**(1051 年)
1051－1062 年：　**前九年の役**
1083－1086 年：　**後三年の役**
鎌倉～戦国：　**安東氏**の展開と大名化

崇神―垂仁－景行紀は関東経略の時代である。最前線は北関東[助川辺り]まで進んだが、まだ内部の東海/駿河/関東一円は安定せず、まだら状に不安定域が存在していた。
応神以降、5C～6C の倭 5 王時代は顕著な動きが見られない。しかし関東内部の安定化が進み最前線は岩城(福島)を越えて仙台平野に入ったと思われる。
飛鳥時代は日本海側への伸長が目立つ。蝦夷とは融和的に衝突は回避されている気配がある。
奈良時代は太平洋側に伸長し奥羽蝦夷との本格的な抗争が始まった時代である。
続く平安時代は激突を経て飽和に達しやがて**蝦夷という存在が解消されてゆく時代**である。

・まず、崇神―垂仁－景行紀を見てみよう。初期大和朝廷の大膨脹が目に付く。四道将軍の派遣とヤマトタケルの東征については先に触れた通り。記紀の記述はかなり儀礼的なもので内実が見えてこない。注目すべきは武淳河別命の日本海コース、私感では東夷や蝦夷との接触は最小限に回避されたか、**融和的な接触**が繰返されたように思える。崇神紀で着目すべきは**豊城入彦の東遷**である。大和朝廷は関東中央の群馬平野に拠点を作りそこから周辺に工作したようだ(上毛野/下毛野君→田道・形名)。また崇神は**建借間命**を送り込み下総/常陸の海岸部に拠点を作っている。これらはヤマトタケルの

東征に先行しており、東夷の駆逐が入念に仕組まれていた気配がある。黒坂の御子、装色古墳。磯前

・次に応神以降の倭の 5 王時代をみてみる。有名な史実として倭王武(雄略)の上表文がある。即ち

昔より祖禰自ら甲冑を貫き山川を跋渉し寧所にいとまあらず、東、毛人を征すること

五十五国、西、衆夷を服すること六十六国、渡りて海北を平らぐること九十五国…・

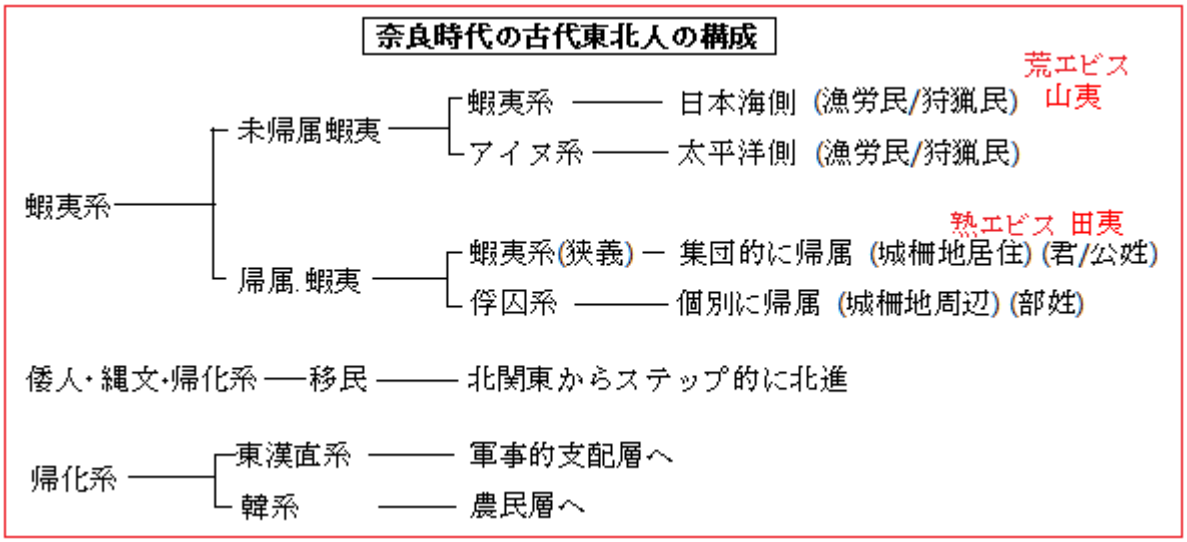
東、毛人は 4 道将軍の派遣やヤマトタケルの東征およびこれに続く北関東征圧をさしていると思われる。東夷の征服は倭政権の重要な事業であったことがよく表明されている。多毛性ーアイヌー蝦夷。中国の史書にも毛民国/毛人国の話はよくでてくる。

(富田林に毛人谷➞エビタニという。エビは蝦夷に連なる、俘囚の居住地か？)

・次に飛鳥時代を見てみよう。敏達天皇のとき蝦夷五千余が辺境を侵し騒いだとされる。そこで朝廷は首魁の**綾糟(アヤカス)**を連行して三輪山に服属を誓わせたという(かなり粉飾されている？)。この場合、辺境は岩城(福島)辺りではないかと思う。寒冷で食料が不足して騒いだとされるがどうだろう？同じ越境が皇極紀でも起きているが、朝廷側から越境して蝦夷地を乱したのではないかと思う。さて飛鳥時代最大のイベントは**阿倍比羅夫の北方経略**である。越の国司、安倍比羅夫は船団を率いて北進して蝦夷の首長恩荷を郡領に任じ渡島(北海道)に渡って後方羊蹄に政庁を設置しアイヌを引き込み更に粛慎(ツングース系)と交戦し和睦した。和戦両用でうまく異族をあしらっている。とくに饗応/接待が多く後日、飛鳥に須弥山を作り蝦夷/粛慎 100 人を呼んで饗応している。**饗応/接待は外交慣例**であるから**飛鳥時代までは蝦夷地を異国(外地)と見ていたこと**になる。なお蝦夷については遣唐使の上奏文に次のように記載されている。暗に皇化(公民化)への意欲がみられる。

種類：**①つがる、②荒えびす　③熟えびす**、食事：五穀なく肉を食す、住居：深山の樹木の根元

・奈良時代の古代東北人の構成を下記に示す。



未帰属の蝦夷は山夷/荒エビス、帰属蝦夷は田夷/熟エビスと呼ばれた。**俘囚**の定義はいろいろあるようだが、**蝦夷集団から離脱して帰順した蝦夷**と理解しておけばいいと思う。移民系は境界線の北上とともに **分家➞コロニー➞建郡** を繰返すかたちで北進したと思われる。

・奈良時代にはいると境界線(開発前線)は**太平洋側で宮城野、日本海側で北出羽**に及んだと思われる。特に太平洋側は生産性が高く、**金の産出**もあって人が入り込んで採取社会が浸食され、激しい蝦夷の

抵抗が起きている。朝廷側も蝦夷の反発に備えて逐次城柵を増やし、そのベースキャンプとして**多賀城**と**秋田城**を築城している。これら軍事施設は陸奥国府や出羽国府としても機能している。
争乱は北上川沿いに北上する形をとりまず入口にある**桃生城**で初発した。城柵の構築に反発した酋長**宇漢目**が柵から逃亡しその後、桃生城を奪取している。**38 年戦争**と云われ 811 年まで続く奥羽争乱の始まりである。この争乱の中で最大のイベントは **780 年の伊治公呰麻呂の乱(宝亀の乱)**である。**呰麻呂は俘囚軍を率いて国府側に立って手柄をたてていたが、同僚と合わず突如裏切って**安察使の紀広純を殺し伊治城と多賀城を略奪して焼き払った。これに呼応して**伊佐西古**、諸絞、八十嶋、乙代といった蝦夷の族長が参戦してゲリラ戦が展開された。この宝亀の乱は呰麻呂個人の私恨から発生したと云われるが、根には派遣官人や移民系官人による使役/蔑視などへの反感・抵抗がある。それまでは**現地官人＋帰属蝦夷**で統治してきたが、呰麻呂の乱を機に関東から軍団が投入され、**律令国家 vs 蝦夷の直接対決の時代**に入ったとされる。

・呰麻呂の消息は途絶えたが争乱は続いた。朝廷は紀古佐美を征東大将軍に任命し軍団を派遣したが有名な**巣伏の戦い**で**阿弖流為**に大敗北を喫した。朝廷はすぐ大伴弟麻呂/**坂上田村麻呂**に大軍(4 万)を与えて派遣し態勢を整えて阿弖流為とこれに同調する母礼を追い詰め降伏させた。そのあと田村麻呂は阿弖流為と母礼を連れて京に戻り助命嘆願したが公家達に拒絶されて 2 人の蝦夷は枚方？で処刑された。朝廷は畳みかけるように再度田村麻呂を派遣して蝦夷征圧を維持し、さらに平和路線の藤原緒嗣のあとに**文室綿麻呂**を据え大軍を与えて**津軽境(爾薩体/閉伊村)**まで進み多数の蝦夷を殺戮している。38 年戦争は文室綿麻呂の掃討作戦で一応の終結をみた。

・大墓公阿弖流為も磐具公母礼も水沢付近の豪族とされるが、根拠地など一切不明、その後謀反人として記憶から葬り去られたが、近年**蝦夷の英雄アテルイ**として復活し宝塚歌劇でも演じられている。一方、**坂上田村麻呂**の人気は絶大でその後長くその武勇は語り継がれ様々の伝説が生まれた、例えば

・達谷窟で兵をあげた高丸、悪路王(アテルイ?)、赤頭(モレ?)を討伐。
・後世知られた藤原利仁と合体して田村利仁将軍、福島の実在豪族から連想して田村将軍
・黒人説もある！公民権運動のディボイスが口走ったもの(田村麻呂の茶髪伝説から派生)
・実際は盛岡止まりなのに奥津軽まできて**日本中央の碑**を残した(→津軽のねぶた絵に)
・高丸伝説→悪路の高丸、悪事の高丸、安倍の高丸（鈴鹿の大嶽丸伝説が伝播したものか？）
・高丸は駿河清見関まで南下し田村麻呂出陣を聞き引き返す。高丸を高清水岡で射殺する。

田村麻呂伝説のある部分は副将軍だった文室綿麻呂の行った最終的な蝦夷討伐を反映したものと云われる。

・田村麻呂/綿麻呂以降、太平洋側では大掛かりな蝦夷征伐は行なわれていないが、日本海側では 878 年、北出羽で俘囚の大規模な反乱―元慶の乱がおきている。これは長年の平和で行政のタガが緩み不正が横行したためで、藤原保則/小野春風の慰撫工作で沈静化し陸奥のように争乱が長期化することはなかった。出羽は比較的穏やかに**農村化**が進んでいたためと思われる。

・平安中期以降は統治の乱れから日本各地に争乱がおきてくる。かっての 38 年戦争の舞台であった

奥六郡 → 胆沢(いざわ)、江刺(えさし)、和賀（わが）、稗貫(ひえぬき)、斯波(しば)、岩手

では**安倍氏**が台頭して**奥六郡に横行し人民を劫略した**。安倍氏の出自は定かではないが土着豪族として奥 6 郡に根を張り半独立国を形成しており公租を納めず柵を作り軍事力を維持していた。

前九年の役はこの強力な土着豪族によって主導された。その経緯は

鬼切部の戦い―源頼義着任－阿久利川事件―頼時戦死・貞任続投―黄海の戦い―清原氏参戦

発端は国府藤原登任が懲罰の積りで仕掛けた**鬼切部の戦い**で、登任は安倍頼時に敗れて更迭され、**源頼義**に交代した。その後、安倍頼時は大赦によって赦免され陸奥守の頼義に従う形に戻った。

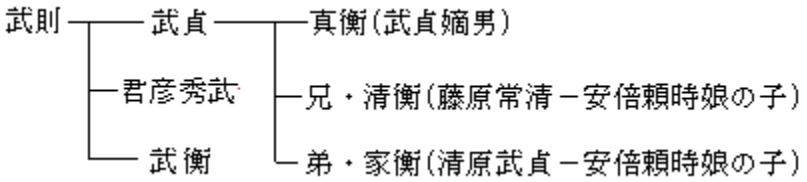
しかし頼義の任期が終わる年、**阿久利川事件**が勃発し、頼義の部下の在庁官人に蔑視されたとして安倍頼時が背き頼義と戦闘状態にはいった。戦線は膠着し頼義は金為時経由で津軽の阿部富忠を抱き込み頼時側の離間工作を図り、富忠説得に出動した頼時は富忠に襲撃されて死亡、その跡を次男の**貞任**が継いで戦闘を継続。**黄海の戦い**で頼義の国府軍は大敗し、安倍氏は衣川南に進出して妹婿の**藤原経清**の白札で徴税、そこで再任された頼義は出羽仙北(秋田)の清原氏を抱き込み、**清原武則**が参戦し、緒戦から清原軍優勢のまま安倍側の柵を次々に落として遂に**厨川の戦い**で貞任を敗死させ**藤原経清**を斬首、かくして安倍氏は滅亡した。

戦後処理では頼義は優遇されず伊予守に降格、清原武則は鎮守府将軍に取り立てられ、**藤原経清の妻(頼時娘)は武則の弟に再嫁して頼時の血は清原氏へ転じた(藤原経清の遺児→藤原清衡)**。貞任の子の**高星丸**は津軽に逃れ(？)、藤崎氏さらに**安東氏**と称して鎌倉期/室町期の津軽**十三湊**に根づいた。源頼義は結局貧乏くじを引いたが、結果的に出自の**河内源氏**は**長男義家の武勇**で神話化された。

頼義→義家→義朝(為朝)→頼朝→足利尊氏

・安倍氏は**ボナパルティズム**でのし上がったという田中勝也の説がある。すなわち安倍氏は**蝦夷の権益を主張しながらも巧みに権威(国府)に取り入って権力を得ようとした**という説がある。
私も同様に、安倍氏は辺境という環境下で【未帰属蝦夷－帰属蝦夷－(国府)－移民系－帰化系】のパワーバランスを取り持つ形で存在したと思う、ただ賤しい蝦夷としての意識は強烈でこれが対立を増殖させ自立に突き進んだ。この意識は東北人の意識の非常に深い所にまだ残っているように思う。

・清原氏は安倍氏の奥六郡を相続し奥州の派遣を握ったが、やがて**内紛によって自壊した**。前九年役のあとの清原氏の構成は次のようである。



争いは秀武 vs 真衡のささいな対立から始まった(この時点で**源義家の陸奥守着任**)。秀武と清衡/家衡は連合して真衡・義家と軍事衝突したが真衡に敗れ、命運尽きる所を真衡の病死によって救われ、清衡・家衡は**タナボタ式に奥六郡を相続**した。ところが奥六郡の分配などから清衡・義家と武衡・家衡が対立し、金沢柵の包囲戦をへて最後に清衡・義家が勝利を手にした。

戦後処理では源義家は戦費不払いで無役に降格、清衡は出羽/奥六郡を掌中に納め藤原姓に復帰して**奥州藤原氏の**始祖になった。

・前九年の役には見逃せない後日譚がある。即ち**安倍貞任の子高星丸**は乳母に抱かれて津軽藤崎に逃れ、高星丸は**藤崎氏**を名乗り更に**安東氏**と称して西津軽の豪族に転じた。安東氏は安倍貞任の子・高星丸を祖と称し、平安末期－鎌倉―南北朝－室町－戦国を生き抜いた非常に息の長い津軽

の豪族である。**海民的性格**を持ち長い間津軽十三湊から道南渡島にかけて蟠踞し 樺太, 朝鮮, ベトナム辺りと貿易したと云われる。

第 1 期：十三湊の根拠を置き道南渡島に移るまで(/安東五郎のエゾ地支配/安東太の蝦夷管領)

第 2 期：津軽西岸から道南にかけて蟠踞し、その後北出羽に檜山安東氏成立

第 3 期：秋田の湊安東氏と北出羽の檜山安東氏の並立

第 4 期：檜山－湊の安東氏合体、戦国大名化➞秋田氏として大名に➞維新後、華族

・安東氏の末裔である**秋田家の寛政呈譜**によれば、

「 **安日王と長髄彦の兄弟が摂津の生駒山に住んでいたが、神武帝が東征して大和に入るとき これに抵抗して長髄彦は殺され安日は北浜に流されたが、崇神天皇の御代に**安倍将軍**河別命 (➞四道将軍)が夷荻を討伐するときに安日の子孫が軍功をあげ安倍の姓をもらった)**

この伝承は会津公事雑考にも見られる。日本書紀には長髄彦に兄がいたという記述はなく作り話とされている。しかし谷川健一は、これを[白鳥伝説]に記しその伝承を否定していない。谷川は津軽藤崎に逃れた高星丸の孫の**高任**が近衛天皇の代(1130 年頃)に**常陸白鳥郷**に移動したと述べている。確かに東北安倍氏(安東氏)には特異な所が多い(多すぎる)。谷川はこの異形の豪族の消息を大和朝廷の東進/北進になぞって捉えている。我田引水してこの議論を拡幅すれば、

偽書・津軽外三郡誌(和田家文書)

大和朝廷の東進に伴って**日高見国**の後退が起きた、即ち大和➞駿河➞常陸➞奥羽という**意識としての日高見国の移動**があった。安倍氏はもともと常陸日高見に原点を持ち四道将軍河別命の軍に紛れて東北に入りさらに奥羽日高見(日高見川➞北上川流域)に拡がったとみていい。北上川に沿う城柵周辺で繰り広げられた大和朝廷との抗争で暗躍してやがて奥六郡に根を張った。しかし前九年役で朝廷との抗争に敗れさらに北方の津軽に逃れて藤崎氏/安東氏を称した。**安東系**は更に十三湊にでて北方の道南(渡島)まで進んだが、**藤崎系の高任**は北進を止め **U ターン**して先祖の地の常陸に帰った(もうその時点では十分に倭人化していたので北に逃れる意味はなかった？)。北に留まり北に展開した安東系は日本海沿いに進出していた**阿刀氏**(物部と同祖)に結びつき**海民的性格**を取得した(安東氏には山民的性格と海民的性格が同居すると思う)。阿刀-ウマシマジ系

河別命が安倍の姓を与えたかどうかはわからない。もともとアイヌ語で**アベ**は**火**(アピ/アビ)を意味し**縄文の風**を強く感じる Word である。因みにアベ/アビという人名や地名は蝦夷－俘囚に強く結びついている(俘囚は日本全国に配流されたため東北以外にも阿部/安倍姓が散らばっている)。日高見をアイヌ古潭のような存在とみれば、アベは**カムイを奉斎するもの**と考えられる。全くの私感だが、桜井に古代貴族・安倍氏の根拠地があるがこれは大和の日高見の跡ではないか？

奈良縄文王国説

大和の日高見には 2 つの拠点があったと思う。もう一つは生駒川上流の**白庭**、長髄彦はここに饒速日(物部の祖)を迎え入れ妹の**御炊屋媛**を添わせて日高見－物部連合王国を作った。遅れて神武軍が生駒下のクサカに到来すると、天孫が 2 人いるのはおかしいと云ってこれを排撃し五瀬命を敗死させた。その抵抗の記憶は蝦夷(東夷)の中に伝播流布されてそれが秋田氏の寛政呈譜となって現われたのではないか？　天皇の華族(子爵)になっても秋田氏は**安日・長髄彦の末裔**を称してやまなかったという。実に千数百年、縄文の風は吹き続けた。ウマシマジ命(生まなければよかった子)

谷川は下北アイヌに**白鳥信仰**が見られることから蝦夷にも白鳥信仰があったと考えている。おそらく

アイヌと蝦夷は部落単位で混ざって暮らしていたと思う(丁度、熊襲と隼人が混居していたように)。蝦夷は新モンゴロイド、アイヌは古モンゴロイドで種族としては異なるが、生業は自然採取あるいは交易であり極めて類似した生活だったので、**文化人類学的な交雑(混血も)**があってもおかしくない。白鳥信仰は藤崎(安倍)高任の常陸**白鳥** 12 郷への U ターンに繋がる。さらに白鳥信仰は倭人にも伝播したようだ、ヤマトタケルは東征から帰る途中で死んでその霊魂は白鳥になった。

・安倍氏、清原氏、藤原氏はいずれもあるこだわりを持って自分が**俘囚の長**であることを主張している。

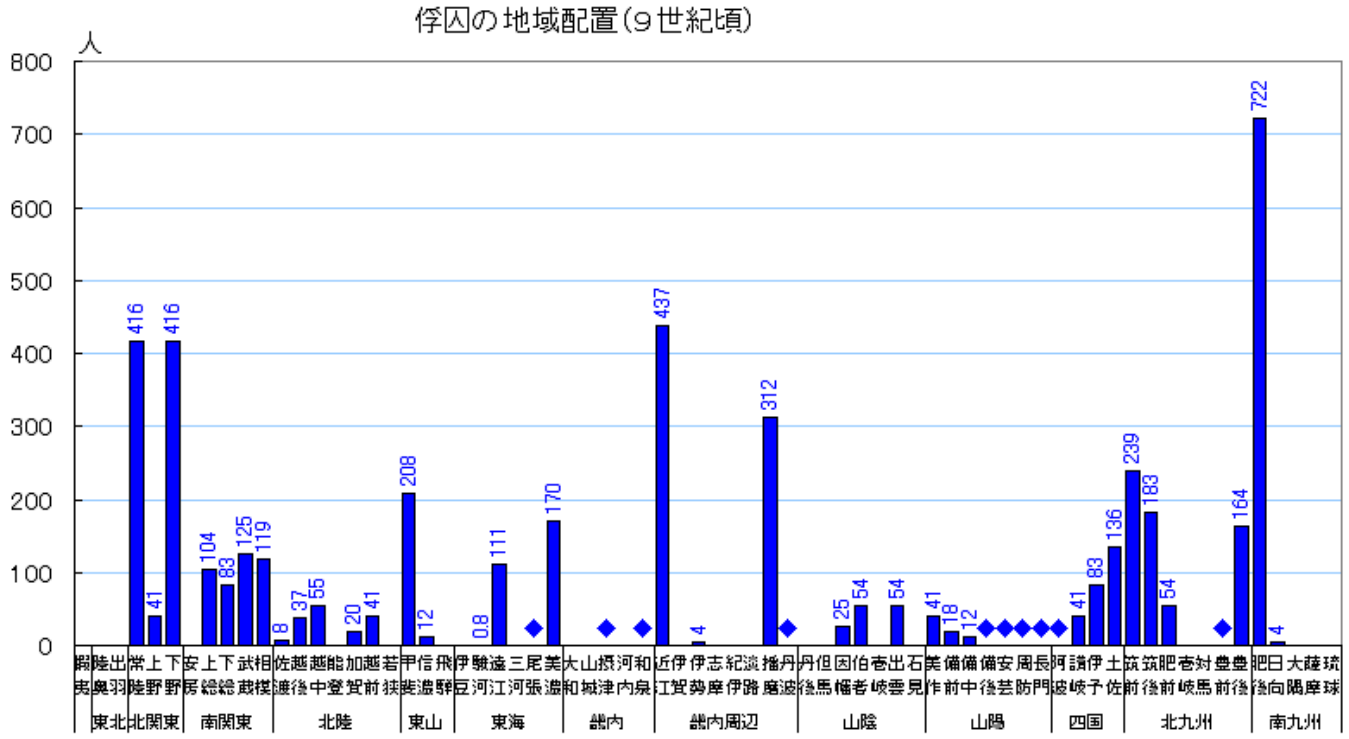
俘囚長(奥州安倍氏)、俘囚主(奥州清原氏)、俘囚上頭(奥州藤原)

東氏も然り。ここで俘囚とはなにか少し説明してみたい。

俘囚は前述のように　7～9 世紀、大和朝廷-蝦夷との戦争でいろんな形で大和側に取り込まれ遊離した蝦夷(男女とも)。特に国内各地に位配された者を**移配俘囚**、残置された俘囚を**奥羽俘囚**という。移配俘囚制度には、降伏した蝦夷が仲間から報復されるのを防ぎ公民意識を持たせる目的があったとされる。移配地は全国に及び、移配俘囚の数は近江と肥後が最も多かった。国司は**俘囚専当職**を兼ねて俘囚の保護/監督/教化を行った。また移配先に定住するまで**租税を免除**した上に**俘囚料**という名目で食料を支給した。実際に定住するものは少なく柵を飛び出し**浮雲のように山野に放浪するもの**が多かったという。俘囚は一般公民と違って狩猟と武芸訓練すなわち乗馬と騎射に優れており軍事力と見なされた(例えば防人として博多湾に配属されその後**松浦党**(武士団)になったケースも有り)。俘囚の戦闘技術は揺籃期の武士に引き継がれた(例えば**蕨手刀**)。平安時代には俘囚の反乱も多かった。

出雲荒橿の乱(813)、下総俘囚の乱(875)、上総俘囚の乱(883)など　鹿島神賤(神奴)

これは一種の待遇改善要求とみられ、朝廷は移配俘囚を奥羽に送還する措置も行った。



(注)『延喜式』の俘囚料による推計人口。◆はこれ以外で六国史から移配が確認される国。
(資料)下向井龍彦「武士の成長と院政(日本の歴史07)」講談社(2001 年)

奥羽俘囚は移配されずにその地に残置されたもの。同じく租税を免除され食料補給を受け、その代償に服従と特産物を貢いだ。そして**無税を利用して交易し富裕化**した。**奥羽安倍、出羽清原、奥州藤原**然り。鎌倉期、奥州藤原氏が滅ぼされると俘囚の特権はなくなったが、ただ安東氏は俘囚長の地位を保った。

特例ながら、倭人なのに俘囚になった例がある。紀州名草出身の大伴某が蝦夷戦争に兵士として参加し蝦夷に捉えられて捕虜になりその後蝦夷の投降で俘囚になったという。これを国府に訴えて認められ公民に復帰している(有名な逸話である)。

・東北と云えば蝦夷、蝦夷と大和朝廷の抗争の歴史がメインテーマになり議論が沸騰してくる。しかし東北に根を下ろした**移民系と帰化系**についても目を向けておく必要があると思う。
まず移民系について。移民の供給元は関東、特に北関東の常陸/下毛野辺りであった。常陸はかって東夷や蝦夷の跋扈する土地(日高見)であったが、大和朝廷に追われて空国になったところに西国から農民が送り込まれた。**建借間命(鹿島命)**は農民兵に杵島節を唄わせながら舟を漕がせ、大洗付近に上陸した(磯前神社の神は海から上がってきたという)、そのためか茨城には**装飾古墳**が多い。装飾古墳は福岡県/熊本県に集中し九州独自の古墳である。更にいえば鹿島/杵島は有明海の島原寄りに昔からある地名である。おそらく常陸のあちこちに"有明開拓団"のコロニーがあったと思う。またもうひとつの供給元の下毛野は上毛野の農民が開拓した土地で、上毛野は豊城入彦と彼がつれてきた纏向の農民によって開かれたので、下毛野のあちこちに"奈良開拓団"のコロニーがあったと思う。
これら北関東のコロニーから余剰人口(次男 3 男)が東北移民として送り出された。例えば常陸由来の菊多郡/行方郡などが陸奥/出羽に向かって次々に建郡されている。これにつれて鹿島神社もステップ的に北上している。　　隼人鎮圧後の薩摩の例　杵島岳→阿蘇開拓者

次に**帰化系**について。これには２つの流れがあると思う。一つは東漢直系の田村麻呂に繋がる帰化系の官人あるいは源頼義/義家の配下の官人が土着して支配層に転じたもの。もう一つは前述の移民に紛れて移住してきた高句麗系/秦氏由来の農民。前者は三陸沿いに分布し一部は**津軽氏**に結集したと考えられる。後者は太平洋沿いに展開した農耕民で多くの**横穴式墳墓**を残したと思われる。

・蛇足ながら、谷川健一は大和朝廷の東進そして北進における**物部氏の役割/軌跡**に注目している。確かにもののふ(武士)の一つの始祖でもあるこの氏族にはある種の特異性がある。物部の祖の饒速日は瓊瓊杵の弟と云われるから天孫族の支族とみていい。分離は遠賀川流域で起きた。遠賀川は助川(鮭が遡上する川)であるからアイヌ/縄文系が棲み付いていた。これら縄文系は弥生人(倭人)を襲撃するので倭人村落には**自衛団ができてやがて物部 25 部に凝結した**と思われる。元々縄文系と対峙して成立した**戦士団**であるため常に**大和朝廷の東進/北進をけん引**していたようだ。物部には内物部と外物部があるが蘇我氏によって内物部が衰退したあとも、外物部は駿河-常陸-**磐城**あるいは越中－**越後**－羽前に顕著な痕跡を残している。ただ律令時代になると運動は見えにくくなった。**国造時代**に果たした物部の重要な役割は何だったのか…。

・最後に海人系倭人について。縄文人が予想外に広く交易していたのは事実だと思う。黒曜石や翡翠の加工品の流通が然り。**海人系倭人**もその例にもれないと思う。沖縄本島の**糸満の漁民**は海流に乗って舞鶴辺りまできている。黄海や朝鮮沿岸にいた海人はいち早く列島に南下し博多湾、鐘崎, 洞海湾に

済州島/鐘ヶ崎の海女、名和氏の由来

【　総　論　】

＊　日本人は一つの言語、文化傾向および DNA 傾向を持った集団であり、もともとある種の単一性があり比較的内部的な分断の少ない民族だと思う。その特性は、ユーラシアの行き止まりにあって島嶼国家に特有の閉じやすさを持った地政学的な環境からくるものと思われる。この環境では外乱が少なくたとえそれが入力されても減衰が早く、文化人類学的な長期熟成が得られやすい。この好適の環境下で、いかに日本人が形成され、いかに多様性を失っていったかをみるのは興味深い。

＊　Native として縄文人があり南九州と奥羽の両縁に押し分ける形で倭人が入り込み、やや遅れて帰化人がこれに加わった図式は誰もが理解できる。この 3 者混淆を常にリードしたのは**稲作と漁労**にこだわる**倭人**で、西から東へそれから北へ稲作の適地を追って増殖していった。この線的な運動に縄文人は生活の場を奪われ辺地に追い込められていった。そこにはまぎれもなく後年の**白人入植者とインデアンの関係**が存在した。この関係において先行するのは、異邦人に対する外交辞令的な融和行動である。しかしそれはすぐに排除と差別に移行する。インデアンならぬ土ぐも達は、多分**海石榴の棒で撲殺されるか山奥に逃げて生活を維持するかあるいは農耕に転じて倭人化せざる**を得なかった(弥生遺跡の中にときどき竪穴住居がでてくる事実は**稲作転向者**の存在を暗示する)。

このパターンは時と場所を変えて幾度も倭人と縄文人と間で返された。ただその様相は次第に**穏便**になっていたようだ。より多くの縄文人が稲作農耕による安定を知るようになる。そのような変化は倭人側の学習成果にも由来している。九州にあったころ**縄文系との関係は緊縛していた**が畿内に倭人支配者が移動した頃には**慰撫と融和の効果**を知っていた。日本海側ではこの倭人の学習効果は有効に働いたが太平洋側では必ずしも有効とは限らなかった。古代東北人は純朴な**土ぐもよりもはるかにしたたか**であった。さらに**中華思想に被れた律令政府の対応が蝦夷を増長させて**剛腕で経済力のある蝦夷系豪族を育てた。恐らくかれらは**開拓地主**で広大な農地を保有し十分に脱インデアンであったと思う。蝦夷としての意識は心の底に残置していたが倭人-蝦夷の境界はほぼ消滅したとみていい。

＊　さて帰化人と倭人の関係は？かれらは先進文化をもち倭人よりも賢かったのは確かである。基本的に彼らは**遅れてきた日本人**である。倭人と彼らはかって中国大陸や韓半島のどこかで隣りあって暮らしていた。韓半島では、**韓, ワイ, 倭　が競って鉄を採掘している**。倭人が累をなして列島に移動したあと、長く疎遠になっていたが、またヨリを戻したといった処か？　移動のきっかけは神功皇后の朝鮮征伐(あるいはこれに類似したイベント)辺りで、中華系？の首長のもとに韓-倭系の農民がぶら下がって縄文人排除の跡地であった北九州に押し寄せた(かって任那に渡った**倭人出戻り組**が多く含まれていたのではないかと思う)。倭人は彼らの最新情報(建築技術/治水技術/農地開拓/宗教/学問/軍事技術等)をどん欲に吸収したが、彼らに呑まれることはなかった。重要なのは日本語(倭の言語)が保持されたことであり渡来人の実体が農民集団であったことである。故にかれら渡来人はきわどく倭人に**馴化**した(倭人が優位を保った)。帰化人は当初、倭人の 1/4 にも満たなかったと思われるが、その**賢さ**で繁殖した。**いまでもその血液は拡がっている**と思う。ともあれ帰化人は日本人の形成に重要な役割を演じたと思う。　　倭人より日本人的とも

＊　詰まる所、日本は東アジア合衆国である。血の混淆はアメリカ合衆国よりはるかに深い。おそらく平安末期から始まる**仏教の民衆化**と**武士の支配**によって種族的なミキシングが著しく進んだと考え

られる。ただ単一な日本人が形成されることで**文化人類学的な多様性はかなり失われた**と思われる。

播磨神崎の異し邦人　　柳田邦男　　遠野物語

＊　学校で行われている歴史教育は**津田史学の影**を引いて**実証を重んじ記紀伝承を軽視する**。科学的であることに異を唱える積りはないが、なにか**物足りない**。**その空白に保守が入り込む**。かれらに言いたい、

霧の中から降り立つ神はいない、

神社には古い死の記憶がある、神坐たちの語りを信じる馬鹿はいない、

久米の子らは薄暗い洞窟バーに蝦夷達を誘い、**鹿島の兵ら**は祭囃子と笛太鼓で土ぐも達を誘い**撲殺した**、磐余彦で煽って民衆を無意味な死に駆り立てアジアの民衆を凌辱し殺戮した、

宗教としての平田神道があった、それを教育に取り込み富国強兵を煽った。

戦後が遠くなってもまだそんなアジテーションに共感する人がいる…

地球主義(あるいは宇宙主義)そして幸福度主義に栄光を

朝鮮の歴史

<table>
<tr><td>考古学</td><td colspan="7">櫛目文土器時代 8000 BC-1500 BC</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="7">無文土器時代 1500 BC-300 AD</td></tr>
<tr><td>伝説</td><td colspan="7">檀君朝鮮</td></tr>
<tr><td rowspan="2">史前</td><td colspan="2"></td><td colspan="5">箕子朝鮮
燕</td></tr>
<tr><td colspan="2">辰国</td><td colspan="5">衛氏朝鮮
漢四郡</td></tr>
<tr><td rowspan="2">原三国</td><td rowspan="2">辰韓</td><td rowspan="2">弁韓</td><td>馬韓</td><td>帯方郡</td><td>楽浪郡</td><td>濊貊</td><td>沃沮</td></tr>
<tr><td colspan="5"></td></tr>
<tr><td>三国</td><td>新羅
前
57-</td><td>伽耶
42-
562</td><td colspan="2">百済
前18-660</td><td colspan="3">高句麗
前37-668</td></tr>
<tr><td rowspan="2">南北国</td><td colspan="3"></td><td colspan="4">唐熊津・安東都護府</td></tr>
<tr><td colspan="3">統一新羅
鶏林州都督府
676-892</td><td colspan="2">安東
都護府
668-756</td><td colspan="2">渤海
698
-926</td></tr>
</table>

紀元前108年頃の古朝鮮